



春夏秋冬⑥ ナウルーズ

奇跡を起こす 聖旗を掲げ 新年を祝う

文・写真 安井浩美

1963年大阪府出身。93年からアフガニスタン取材。アフガン遊牧民の生活の記録撮影をライフワークとする。現在は共同通信社のカブール支局通信員。著書に『私の大好きな国アフガニスタン』（あかね書房）。

ペルシャ暦の新年元旦を言う「ナウルーズ」。ペルシャ語でナウは「新しい」、ルーズは「日」を意味し、春分の日に当たる。アフガニスタンでは、例年3月21日がナウルーズだ。人々は、春が近いことを喜び、そして新年を祝い、各地のイスラム聖者廟では、「ジャンダ・バラ」と呼ばれる聖なる旗を掲げる儀式が行われる。

北部のマザリシャリフにあるハズラト・アリ廟※は、特に盛大にジャンダ・バラが行われ、各地から数万もの人がこの儀式を一目見ようとやって来る。中庭に掲げられたジャンダ（聖旗）に巻かれた布は、奇跡で病を治すといわれ、人々はその布を持って帰ろうと、ジャンダによじ登り、すさまじい光景が繰り広げられる。ジャンダは40

日間掲げられ、その間、聖廟には病に苦しむ多くの人が祈願に訪れ、奇跡を待つ。

一般家庭では、7種類のドライフルーツやナッツを砂糖水に漬けた「ハフト・メイワ」が訪問客に振る舞われ、新年を祝う。



ハフト・メイワ



※イスラム教の正統カリフ(預言者ムハンマド没後のイスラム社会の最高指導者)4代目アリが眠る。